

<今日の説教のポイント コリントの信徒への手紙Ⅱ 1章15-22節>

1 (15-17) 「計画がいい加減だ」と言われたら、どう答える？

「旅の計画が二転三転している。いい加減で二枚舌だ」とパウロは非難されたのです。そう言われたらどう答えるでしょう。普通は、「それには理由がある。すなわち、…」と計画を変更した理由を説明するのではないのでしょうか。しかし、パウロはそうはしませんでした。「そんなつまらないことを考えているのか。もっと大事なことがあるだろう」と思ったのです。それはこの後に語っていることから分かります。

2 (18-20) 一番大事なことは何か？ そのことから考えよ！

「然り、否」の内容が旅程のことから神様のことに変わっています。パウロはここで、始まったばかりの基督教の教理上重要なことを語っています。「神の約束は、ことごとくこの方において『然り』となったからです。それで、わたしたちは神をたたえるため、この方を通して『アーメン』と唱えます」(20)。これは、旧約聖書の神様がなされた約束(選びの民を見捨てず救い出すための主の僕の遣わし：イザヤ書 53 章)が、「神の子イエス・キリスト」(19)によって成就した、だからこの主イエスによる福音を伝えるのだ、と言っているのです。自分たちが伝えていることの重要性を知ったなら、どうしてそんなこと(旅程の変更)にいつまでもこだわるのだ、と言っているのです。主の教会は、常に一番大事なこのことに皆が立ち戻ることから一つとなって事に取り組んで行ける群れなのです。

3 (21-22) 割礼なしでいい理由 — 信仰が持てたということ！

パウロはもう一つ教理的に大事なことを語っています。聖霊についてです。神様が信仰者を「キリストに固く結び付け」(直訳：キリストの中に[または、上に]固く立て)(21)て下さったのだ、すなわち、そう信じる思いが与えられたことこそが聖霊が与えられたということなのだ、と語っているのです。私たちが神のものとされた(聖徒の意)印が、割礼を与えられることからイエス・キリストを信じる信仰が与えられることに変わったのです(ローマ 4:11 → 2:29)。この救いが礼拝で語られる毎に皆で「アーメン：その通りです」と唱える群れ、それが教会なのです(20)。